死んだ海を戻すには

（下）

水俣病問題の今後を聞く

出席者
知事　寺本広作氏
県議会議長　岩尾豊氏
県漁連会長　村上丑夫氏
県商工水産部長　森永竜三氏
本社　豊福編集局長、福田政経部長
（順不同）

「魚の信用」回復が先決

遠海漁業への転換も

――水俣病問題で関係漁民が騒いだことの背景には、沿岸漁業の不振という宿命的なものがあったと思う。つね日ごろから苦しい漁業に、水俣病問題が起きて、火に油を注いだ結果になった。今後はこの不振にあえぐ沿岸漁業をどうするかということが、とくに取り上げねばならぬ問題ではないでしょうか。

森永　ところが、本県の沿岸漁業の水揚げ高は、この二、三年横バイ状態です。減少してはいません。もっとも、すう勢としては、農薬や工場排水などもあり、衰えて行く傾向にあると思いますが。

――横バイというが、最低線を横ばいしているんではないですか。

森永　そうもいえますね。これ以下にはドがれないというラインでね。

村上　沿岸漁業不振の最大の原因はホリドールなどの農薬です。とくに、本県のような有明海、不知火海は外海との潮の交流が比較的に少ないために、雨でドッと流れ込んだ農薬がたまってしまう。

寺本　沿岸漁業対策には、大きくわけて二つのものがある。一つは沿岸漁業そのものを振興するために、築磯や魚しょうなどをつくることだし、他の一つは沿岸をあきらめて遠海に出て行くことだ。このために、十二月県会の追加更正予算案にも転業相導費を計上した。誰かが対馬あたりに行って成績を挙げれば、他の人もこれにならう。予算はそのためのさそい水だ。しかし、外海に出れば出るでいろんな問題がある。対馬のイカ釣りでも水産庁から指示があって、不知火海沿岸の漁協には水揚げできず、長崎県側の漁協に売ることになった。

岩尾　議会の水俣病対策特別委員会でも近く対馬海域を視察し、長崎県当局によろしくお願いしてくる予定です。打てるだけの手は何でも打つべきだと思う。

――相導船はいいのがありますか。

森永　玖磨丸は小さすぎるし、もっと大きいのをと目下中央に要望中です。そして来年は漁業の前進基地を対馬、五島、奄美大島の三カ所につくり、係官を常駐させて漁船に燃料や食糧などを世話させる計画です。

――自力で遠海に出れない人には、高知県あたりの遠海漁業者として就職をあっせんする考えですか。

寺本　そうです。さし当たり牛深のまき網漁業者から不知火海沿岸の漁民五十人を世話してくれと県に依頼があった。

村上　熊本は牛深という漁港があるが、遠海に出て行く人は少ない。天草モンローで固まって、本土との資本提携がないものだから枕崎や焼津、油壺などよりも資本的に立ちおくれている。これも問題です。

――ところで、新日窒が関係漁民に出す立ち上がり資金六千五百万円はどう使われますか。――

村上　これから新日窒と融資の具体的契約をもるわけですが、漁民のなかには漁具を質草にして食いつないだ者も多く借金のアナ埋めに大部分が使われるのではないでしょうか。本当の立ち上がり資金になるのは六千五百万円の三分の一ぐらいだろう。その意味でも県の諸対策を期待している。

――さし当たりの問題として、不知火海の魚の信用回復問題がありますね。

森永　工場の浄化装置が完成するのを機会に、県としてもそのためのPRが必要だと思う。危険な魚だといっても、相当多量に食わないと発病しない。そのことは熊大の研究陣もいっていることだ…

寺本　そこで私が〝不知火海の魚を食う会〟をやろうと県政記者団に提案しているのです。私ももちろん食いますよ。（笑）

――荷受け機関へのPRも必要なわけですね。

寺本　こんどの調停を通じて、漁民の人たちが何を考え、何を希望しているかが大分わかってきました。今後の対策のうえに十分取り入れていきたいと思います。

村上　ぜひそうお願いします。